

古傷が痛い

“古傷が痛む”という経験は多くの人々にあるのだらう。しかし、七十数年も前の古傷が耐え難く痛いというのは珍しいことなのではないか。

私は山梨県の甲府市で生まれ育った。昭和二十年七月六日の深更、一〇〇機を超えるB29がここに飛来、大量の焼夷弾を落下させた。三十分ほどで市街地は破壊されつくされた。燃える火の中を家族全員で逃げ惑い、どうにか死なずにすんだ。しかし、逃避の最中、焼け落ちてきた電線が私の右手と左足に接触した。火傷の痕は今もまぎれもなくその部位に残っている。もう七十数年間、軀の一部にこびりついてきたものである。最近、左足の一部が妙な痛みを発するようになった。天気が変わると気圧も変化した。交感神経が刺激されて古傷が痛む、といった話は聞いたことがある。そんなものか。それにしてもこのところ、注意が左足の方にいつも向かわされてつらい。最近では左足を靴に入れることが難しくなってきた。ともかく外科病院で診てもらおうと出かけた。医師も、長らく痛むことがなかったのに急に痛み

渡辺利夫

(公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十二月退任)。二〇一七年六月より現職。

出したのがなぜなのかはわからないが、痛みの原因そのものはわかる。指の内部が変形しており、変形したまま癒着しているのが原因だとMRIの画像をみながら説明してくれた。痛みを取るためには、その部位を切開して変形したところをもとの形に戻す以外にはないといわれ、過日、その部位の手術を受けにいつてきた。

ウクライナの市街地が無数の砲弾により壊滅されているさまが、テレビに毎日のように映し出されている。こういう画面をみるたびに六歳の時の甲府のあの阿鼻叫喚のことが思い起こされる。天気が悪いと古傷が痛むならば、蘇る遠い昔の恐怖感情が古傷の痛みを誘発するということだ。ただ、あるんじゃないかとも思う。人間とは心身一如の存在である。精神を穏やかに保つことが肉体を健全にするのには必要なことだとは思ふもの、そんなことをこの人間社会は許してくれそうにない。コロナ禍での不安と恐怖、ロシアのウクライナ侵攻の惨劇、穏和な老後を期待してもどうやら無理なのであろう。